

学部・研究科名 応用生物科学部
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 農芸化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論・演習・実験科目のほか、分野横断的な選択科目（生体機能化学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。	大学院生への教育・研究支援は、所属研究室におけるセミナー、個別指導などを通じて手厚く行っている。	学生の研究活動、講義科目の成績、発表会などから総合的に評価している。	所属研究室における定期的なセミナー、専攻全体での中間発表会、および最終発表会などを通じ、継続的に学習成果を把握している。	評価アンケートの結果や各研究室の現状、教員間で共有し、会議の場で議論するとともに、継続的な改善に努めている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、農芸化学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康に関わる課題解決に取り組むことができる学生を求めている。大学院進学後に必要となる学力を評価するため、英語と農芸化学基礎（生物化学及び有機化学、無機化学）を試験科目としている。これらの筆記試験に加え、大学院指導教授による口頭試問により評価している。合否判定については、会議において、厳正・公平な審査を行っている。2期入試受験者に対しては、口頭試問において、卒論研究に関するプレゼンテーションを行うことで適正を測っている。	試験後の選考会議において、専攻の教員間で十分に議論し、学生選抜の適切性を担保できるよう努めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各研究室に必要な人数の教員が在籍し、各教員の専門分野も専攻の専門性に沿っている。 採用時の面接で教育や研究に関する適正を測っている。	学内ルールに則り、教員の新規採用と昇任手続きを実施している。	FD セミナーなどに教員が積極的に参加している。	学科全教員もしくは大学院指導教授をメンバーとする会議体により、情報共有と意見聴取を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 醸造科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づき、基礎的基盤的知識の習得に関わる科目を初年次及び2年次に重点的に配当し、3年次では応用的な科目を、4年次ではそれらを統合した卒業論文を必修科目として配当することで、段階的、体系的に学べるように教育課程を編成・実施している。	1年生のフレッシュマンセミナーにおいては、3つのポリシーを説明する時間を設けているほか、学習目的を明確にする工夫を講じている。また、教育効果をあげるために、インターンシップ型の実習を基礎と応用を十分に学び終えた3年次後期に配当している。	入学時に1年生全員に対し、進級・卒業要件を明示している。各教員がシラバス記載の成績評価基準に則り、適切に単位を認定している。学位授与については、学科教員会で審査を行い、全員一致をもって授与の可否を決定している。	卒業年次学生に対して、学生調査を実施することで、学生のディプロマ・ポリシーへの達成度を把握、評価している。また、定期的に学生のGPAを把握することで、GPAが低い学生について個別の指導を実施している。さらに、学生対象の授業評価アンケートを元に授業の改善を行っている。	カリキュラム委員会において時間割編成の適切性について検討を行っている。卒業年次学生に対して行う学生調査の回答結果から、教育課程の内容と方法がディプロマ・ポリシーを達成するために適切であったかを点検することで、教育課程の内容・方法の適切性の評価を行なっている。また、各学年のGPA分布の形状や平均・ばらつきから、教育課程の内容と方法が適切であるかを確認している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】学生の社会的及び職業的自立を図るために、3年次にインターンシップ型の実習科目を取り入れている。	【長所】企業や公的機関とのつながりを生かし、学習状況に応じて実産業について学ぶ機会を設けている。	【長所】適切に成績評価、単位認定を実施している。	【長所】学科のディプロマ・ポリシーが明解であるため、学生調査に基づいた学生の学修成果を把握しやすい。	【長所】全学生についてのGPAデータは、大学から毎年決まった時期に開示されることから、定期的な点検が実施できている。
	【特色】最終学年の卒業論文を必修科目として位置付けることで、3年次までの学習内容を統合して理解できるように配慮している。	【特色】専門性が高い学科のため、学生の目的意識が強く、関連企業の講演などにより、効果的に学生の修学意欲を活性化できている。	【特色】なし	【特色】同上	【特色】GPA分布は全ての学年で毎年算出している指数であるため、客観性があり、学科間や学年間での比較も行える。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】教育内容を段階的に設定しているものの、初年次学生の基礎学力に幅があるため、特に化学系科目において、理解不足のまま進級する学生がいる。	【問題点】必修科目では、授業履修学生数が150人を超えるため、学生全員に均質な学修意欲を持たせる工夫が難しい。	【問題点】なし	【問題点】1, 2, 3年次においては、GPA以外の学修成果の把握は充分ではない。	【問題点】現時点では、学生調査の結果を個々の教員の授業改善等に全面的には生かし切れていない。
	【課題】入学後の教育において基礎的項目についてフォローする体系的なサポートを行うことが望ましい。	【課題】上記問題点について、引き続き工夫する必要がある。	【課題】なし	【課題】高学年での学修の基盤として必要となる、低学年次の化学・生物系基礎科目の学習成果を正確に把握する方法を検討する必要がある。	【課題】学生調査の結果において、ポイントが低かった項目について、教員が改善する意識を持つよう周知する必要がある。また、GPA以外の客観的な学習成果の評価方法を模索する必要がある。
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学科のアドミッションポリシーに基づいた内容で高校生に対する情報発信を行い、学生募集を行なった。大学の定めた入学者選抜制度の枠組みの中で、アドミッションポリシーに則った入学者の選別を行なうため、学科内に基準を設定し、それに基づいて公平・適切な選抜を行なった。いずれの型の入試においても、学科教員全員による厳正な審査により、可否の判定を行なった。	毎年年度始めに、本学科在籍者全員の学籍データ（入試制度・GPA 記載のもの）を教員全員で共有し、入試制度および学生受け入れの適切性について点検・検証を行なって、次年度の入学者選抜の際に生かしている。また、本年度は、コロナ対策にともなう入構制限により例年新入生に対して実施しているアンケートを行うことが出来ず、募集や学生受け入れの適切性に関する点検・評価を行うことが出来なかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 将来、酒類・食品製造・環境浄化、エネルギー開発等の微生物利用産業の発展に寄与する意欲を持つ学生を、色々な側面から広く集めることができている。	【長所】 カラーのはっきりした学科であるため、学生の傾向を把握しやすい。
	【特色】 醸造科学に興味・関心をもつ学生のみならず、実際の醸造業の後継者の受け入れに成功している。	【特色】 学生の志向の面からは、受け入れは概ね適切に行なわれていると考えられる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 入試制度が多岐に亘るため、本学科アドミッションポリシー（1）の項目について若干不適合の学生が一部発生している。	【問題点】 入試制度が多岐に亘るため、学科の方向性と学生の志向とのマッチングは概ね良いものの、学生間の学力のバラツキが若干大きめの傾向がある。
	【課題】 大学入学後のリメディアル教育等を充実させ、入学後の就学に支障をきたさないようにする必要がある。	【課題】 入試制度にかかわらず、本学科のカリキュラムおよびディプロマポリシーに対応できる学生を入学させる努力と工夫が必要である。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の方針に則り、学科の教員組織の編成に関する方針を明示している。	現在の教員配置は、完全に方針を反映した形となっている。	本学科は研究室ごとに明確な醸造の対応業界を持ち、一研究室3名の教員構成（年齢・職階的なバランスも考慮）となるよう、随時適切な募集・採用・昇任を行なっている。この方針および大学の人事方針に則り、本年度も新規採用教員1名の募集を行なった。	コロナウイルスの対策のためFDに関する説明会への参加や醸造食品部会での活動を行うことが出来なかった。	昨年度から6研究室体制で活動を行なっている。今後、学科の教員組織の適切性について検証を行なう必要がある。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 編成方針と齟齬がなく、学界・業界の双方に対応可能な教員配置となっている。	【長所】 教員組織の編成方針が明解なため、募集の際の条件も明確である。本年度は助教を1名採用でき、各研究室3人体制が整った。	【長所】 学科の方向性が明解であるため、資質の向上を図る機会を設けやすい。	【長所】 なし
	【特色】 教員組織の編成方針が明瞭である。	【特色】 国内でも数少ない発酵・醸造専門の研究・教育機関として機能することが可能な教員配置となっている。	【特色】 なし	【特色】 伝統／先端、教育／研究、産／学のバランスのとれた学科活動に向けての研鑽を行なっている。	【特色】 醸造科学分野において、より効果的な教育・研究を実践できる教員組織となることが予想される。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】	【問題点】 学科として目指すものが多く、ややもすると教員のオーバーワークに繋がってしまう。	【問題点】
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 一部の教員に負担が集中しないように、教員配置に沿って、全員が業務を適切に分担する。	【課題】 なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 栄養科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づいた授業科目を設置している。カリキュラム編成時には、学科教員会の下にワーキンググループを作成し、カリキュラム・ポリシーに沿った授業体系の編成を目指している。	フレッシュマンセミナー（1年次）や栄養科学特論（3年次）などの科目において、地域・産業界・官庁等で活躍している社会人による講演を行い、学生の学習意欲の動機付けにしている。	大学の評価基準に則り、単位認定を行っている。	栄養科学科のディプロマ・ポリシーをフレッシュマンセミナー（1年次）で説明している。また、各授業においても再度確認を行い、学生への意識付けを行っている。また、4年次に総合演習（一）（二）を開講し、4年間の総合学習を行っている。	授業評価アンケートを行い、授業内容の妥当性の把握と次年度に向けた改善を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・本学科が目指す管理栄養士像を教員間で共有し、各教員が担当科目の役割を意識して教育することができる。	【長所】 管理栄養士の活躍状況を知ること、自らの卒業後をイメージしやすくなり、学習意欲の向上につながる。	【長所】 評価の基準点が明確であり、目標を持って取り組むことが出来る。	【長所】 学習意欲を高く保つことは管理栄養士国家試験に合格するために必須である。	【長所】 資格教育を行いつつ、学生のニーズを取り入れた授業を実施することを教員が意識できる。
	【特色】 ・厚生労働省が示す科目体系に、本学科が目指す農学、医学などの特色を加えた授業体系を編成している。	【特色】 病院や施設のみならず、様々な分野で活躍している管理栄養士の講演を行っている。	【特色】 国家試験受験資格を得るため、必要な単位数は多いものの、合格基準を明確にすることで着実にこなす意欲につながる。	【特色】 卒業時に管理栄養士国家試験を受験するため、学習成果が教員および学生にとって明確である。	【特色】 管理栄養士養成課程であるため、科目間のつながりが深く、一つの教科の改善が他教科にも影響する。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、各入学者選抜試験を行っている、合否判定会議は学科教員会で決定している。	入学定員に対する入学者数で判断している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・アドミッション・ポリシーに基づいて入学者選抜を適切に行うことは、卒業時に国家試験に合格し、社会で活躍できる管理栄養士の輩出に直結する。	【長所】 ・適正な入学定員数を維持できる。
	【特色】 ・	【特色】 ・適正な入学定員数を維持することにより、適切な授業運営ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・入試制度が多岐にわたるため、本学科のアドミッション・ポリシーに必ずしも適合しない学生が若干名いる。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・入試制度に関わらず、管理栄養士国家試験合格を全員が目指すよう入学早期から指導する必要がある。 ・大学入学後のリメディアル教育等を充実させ、入学後の就学に支障をきたさないようにする必要がある。	【課題】 ・なし
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	栄養科学科の教育研究目標に対して、各専門分野の教育研究に必要な専門性の高い教員の採用とその編成について方針を明定している。	栄養科学科の教育研究目標を達成するための専門性の高い教員組織の編成を行っている。	教員の募集、採用にあたっては、教育研究目標を達成するための専門性の高い教員募集、採用を行っている。昇任にあたっては、大学基準に則り、適切に行っている。	FD の組織的な実施を行っている。	適宜、行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・管理栄養士養成に必要な科目は多岐にわたるが、分野ごとに専門性を明示することで教育・研究の質向上にもつながっている。	【長所】 ・研究室内で教員同士の成長を促すことはもちろん、専門の異なる研究室間でも資格養成という教育目標を共有して互いに教育・研究の質向上に影響を与えている。	【長所】 ・就業年数ではなく研究業績や授業の担当状況などが昇格に影響することは、教員のモチベーションの向上につながる。	【長所】 ・組織的に FD 活動を行うことで、本学科が目指す管理栄養士像を共有しながら改善に取り組むことが出来る。	【長所】 ・管理栄養士養成に必要な教育を再確認できる。
	【特色】 ・人間栄養学分野と食品栄養学分野に大きく分類している。	【特色】 ・研究室は専門分野に分かれているが、1年次の導入科目や4年次の総合科目は全研究室で受け持っている。	【特色】 ・採用に当たっては、特に管理栄養士養成に対する考えや意欲、科学的根拠を発信する研究力を重視している。	【特色】 ・教育の成果が管理栄養士国家試験の合格率として明確に現れる。	【特色】 ・質の高い管理栄養士養成ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・学生の学力に幅があるため、国家試験対策が教員のオーバーワークに繋がってしまう。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・一部の教員に負担が集中しないように、研究室担当教員も学生の試験対策指導にあたり、全員が業務を適切に分担する。	【課題】 ・なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 食品安全健康学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	昨年度、2018 年度にスタートした新カリキュラムの完成年度であったが、その特色は、カリキュラムポリシーに則っており食品の安全性と機能性について両方を十分に学ぶことができ、また科目間の連携と専門性を検討した科目編成になっている点である。2020 年度より新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策に従い、授業開講形態が Web 教材で行った科目があったが、今年度はほぼすべての科目で対面となった。例年通り、フレッシュマンセミナーや食品安全健康学概論、共通演習を通して、入学初年度より大学生活および授業の概要に接する機会を設ける工夫を行っている。また、卒業年次生の卒業研究については、研究室活動がほぼ通常に戻ったため、これまでオンラインを中心に行ってきた学生教育・経験を充足すべく対応を行った。	現行カリキュラムでは、1 年間及び各学期に履修登録できる単位数をそれぞれ 49 単位、25 単位と設定し、各科目を十分に予習、復習ができるようにしている。シラバスには、今年度も授業の目的、到達目標、取り扱う領域、各回で行う内容及び準備をしておくべきこと、学んだことが活用できる領域、評価の方法等を記載し、学生の学習を活性化できるようにしている。 学習量が多い科目、また①で昨年度も問題点として挙げられた化学関連科目に関しては、適宜中間試験を設け、中途における習熟度を確認している。また、小テストなどにより前回学んだ項目について、各自理解度を確認させている科目もある。	単位制度および学位授与は、1 年次に学生全員に配布する学生ハンドブックに記載し、入学オリエンテーションにて学生に周知している。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。卒業論文審査は、学科各研究室において、研究室全教員出席のもと、卒業論文発表会を行い、審査した。	「農学概論」において農学全般の分野に触れさせた後、「食品安全健康学概論」において学科の分野および研究室の概要の説明を行った。こうした科目では、S~C 評価だった学生が 96.3%（農学概論）、94.7%（食品安全健康学概論）と 95%前後であったことから、学生へのディプロマ・ポリシーは概ね周知できたと考える。配当基礎科目における単位取得率は、ほとんどの科目で 90%以上となった。基礎科目と専門コア科目いずれも平均が 95%程度であった。（資料 1）また、学生の中で GPA が特に低い場合（通年平均 GPA が 1.5 未満）、後期試験終了後に学年担任の教員と面談をして個別に指導を行った。	年度ごとに、各科目において学期末、学生アンケートを実施し、その結果を各教員に配布して、次年度以降の授業に役立てるようになっている。 旧カリキュラムでのアンケートをもとに、各学年の学習成果を鑑みて、2018 年度から新カリキュラムで施行した。新型コロナウイルス感染症禍という想定外の事態が生じたこともあり、今年度に新カリキュラムの成果を評価することは困難であると思われるため、来年度以降まで経年経過を追う必要があるが、引き続き、化学の習熟度をさらに増すために、基礎科目である「化学」および「基礎化学演習」を中心に理論習得と演習による補強を行い、「基礎化学実験」において実習による基礎知識の定着に取り組んだ。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】 2018 年度にスタートした新カリキュラムにおいても、食品の安全性・機能性に関して、基礎から応用まで幅広く学べる編成になっている。	【特色】 今年度も様々な科目において、中間テストを設けるなど、前回学んだ項目を確認させるための小テストを実施した。	【特色】	【特色】	【特色】

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 化学を十分に学んでいない学生が多い。	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】 引き続き、関連科目や実験実習を通じて、化学の基礎から卒業研究までの連携を検討することが求められる。	【問題点】	【問題点】	【課題】 今後のカリキュラム改変において、学生アンケートから問題点を探し出し、改善を図ることが必要と考える。	【課題】 新カリキュラムの問題点を洗い出すため、数年間は学生の習熟度に注意しながら学科の特徴を際立たせるためにはどのようにすれば良いか検討する必要がある。
根拠資料名				資料1 2022 年度単位取得率	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明					
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 農芸化学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学の理念に基づいた教育の推進	学科の理念に基づいた教育の推進	卒業論文の充実化
実行サイクル	4 年サイクル（2019 年～2022 年）	4 年サイクル（2019 年～2022 年）	4 年サイクル（2019 年～2022 年）
実施 スケジュール	フレッシュマンセミナーにおいて実施した。	フレッシュマンセミナー、農芸化学演習、共通演習、実験実習において実施した。	研究室演習（一）、（二）、卒業論文演習（一）、（二）、卒業論文において実施した。
目標達成を測 定する指標	該当科目の成績、出席率、授業評価により判断した。	該当科目の成績、出席率、授業評価により判断した。	該当科目の成績、出席率、授業評価により判断した。さらに、各研究室の代表者による学科卒論代表者発表会を開催した。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	該当科目の評価責任者を中心に現状を把握した。	該当科目の評価責任者を中心に現状を把握した。	該当科目の評価責任者を中心に現状を把握した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究業績の発信		
実行サイクル	____4____年サイクル（2019年～2022年）	____年サイクル（平成____年～____年）	____年サイクル（平成____年～____年）
実施 スケジュール	定期的に自己点検システムの更新を教員へ促した。併せて、学科HP内に学科ニュースリリースを設置して、研究に関するトピックスを発信した。		
目標達成を測定する指標	学科HPで内容を確認した。		
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	自己点検システムを適宜、更新した。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・なし	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	学科HP		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標			
実行サイクル	_____年サイクル（平成 _____年～ _____年）	_____年サイクル（平成 _____年～ _____年）	_____年サイクル（平成 _____年～ _____年）
実施 スケジュール			
目標達成を測 定する指標			
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学部
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 醸造科学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	醸造・食品メーカーと提携して、インターンシップ型の学外実習を実施することにより、醸造科学の理論と実践を総合的に理解させる。	卒業研究を通して、発酵・醸造理論の理解を深めると共に、本分野における新たな課題の発見や解決法の模索、既存技術の改良や新技術の開発に繋がる発想やスキルを修得させる。	大学院への進学者数増加
実行サイクル	1 年サイクル（令和4年～5年）	1 年サイクル（令和4年～5年）	4 年サイクル（令和3年～令和7年）
実施 スケジュール	三年次生に「醸造科学特別実習」の積極的な履修を促し、学科とメーカー間で密な連携をとることにより、令和4年12月の仕込み時期に合わせた二週間のインターンシップ型学外実習を実施する。	三年次より研究室に所属させ、卒業研究開始前に事前のトレーニングおよび研究室生活へ適応期間を設ける。四年次に一年間（常時担当教員のサポートの下で）個別の研究テーマを主体的に遂行させることを通して、醸造科学の知識・理論の運用や解析方法を実践的・統合的に修得させる。研究結果を四年次の年度末に卒業論文として纏めさせる。	一年次のフレッシュマンセミナーや共通演習等を通して、本学科の分野における研究の魅力や大学院修了者の活躍などを学生に紹介する。二年次・三年次においては、各教員の担当科目を通じて研究の魅力を印象づける。四年次には卒業研究の過程で進学する動機付けを行なうように指導する。
目標達成を測定する指標	以下の二つの指標を併せて到達度を判定する。 ・実習中は毎日日誌をつけることを課題とし、実習終了後に学科に提出させる。日誌の記載内容より学科教員が評価を行なう。 ・各企業の実習担当者より、実習終了時に実習態度・到達度合い等について評価をしていただく（評価報告書を学科に送付していただく）。	学生が所属する研究室教員との研究討論や発表会での内容から、研究室教員がスキルの修得状況を学生ごとに評価する。併せて卒業論文の内容を以って、総合的に到達度を判定する。	各年度の大学院進学者数により測定する。
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	令和4年12月12日（月）から12月23日（金）の二週間実施した。132名の学生が、2～4名のグループに分かれ、合計64の企業等において実習を行なった。	4年生141名が所属研究室において、研究室教員の指導の下、卒業論文作成のための研究を行ない、研究成果の論文化を行なった。現4年次生は、3年次から研究室に所属しトレーニングを行った。	共通演習や各教員の授業・卒業研究指導を通して醸造科学分野の研究の魅力を学生に伝えた。2023年度前期課程合格者は29名、後期課程志願者はいなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多くの本学科卒業生経営の企業に協力いただいております、学科と実習先の連携がスムーズに行なえている。	【長所】 最終学年において、教員と距離の近いコミュニケーションの中で、直接スキル修得ができる。	【長所】 学生に進路についての選択肢の多様性を多くの機会に直接伝えられる。
	【特色】 このような実習を成し得ているのは、全国的に見ても本学醸造科学科だけである。実学主義を体験できる。	【特色】 4年生全員が、研究室での実験や発表会を通して主体的に学びの場に参加する。	【特色】 学科教員が多くの事例を紹介できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 前学期が就職活動期と重なる。	【問題点】 入学時の大学院進学希望率があまり高くない。
	【課題】 なし	【課題】 学生と研究室教員のコミュニケーションをよくなり、就職活動中も学生の卒業研究のモチベーションを損なわないように留意する。	【課題】 大学院進学を視野に入れた大学受験生を集める工夫が必要である。
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科共通機器の効果的運営	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	____4____年サイクル（令和4年～令和8年）	____1____年サイクル（令和4年～5年）	____1____年サイクル（令和4年～5年）
実施 スケジュール	策定した共通機器使用ルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。	・学会発表は、学科で年間20件以上を目標とする。 ・外部資金申請は、学科で年間6件以上を目標とする。 ・原著論文投稿数は学科で年間12件以上を目標とする。	学科全体として、年間10件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	ルールを策定し、各研究室にて積極的に利用した。また、学科外を含めた共同研究先との研究にも効果的に使用出来た。	論文発表数は、学科全体で11件 学会発表は、学科全体（6研究室）で33件。 外部資金申請件数は、学科全体で25件。 今年度発表論文のうち、IFの高いものは9.043であった。	今年度の関連する公的機関や企業との共同研究数は、学科全体で54件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 最新の機器を利用することで、新たな発見につながることを期待される。	【長所】 論文発表数は目標より1報少なかったが、外部資金の獲得状況は順調と考えられる。	【長所】 各研究室が、それぞれの担当領域に応じた適切な連携を行なっている。
	【特色】 これまでに明らかにされていない醸造物中の新規な成分の発見につながる	【特色】 発酵・醸造分野においてレベルの高い研究を実施できている。	【特色】 学科の特色を反映した明解な連携が多いことが特色である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 各教員の研究時間の確保が難しく、全ての研究室にて運用できていない。	【問題点】 教員の研究時間の確保が難しい。	【問題点】 なし
	【課題】 勉強会などを行っていくことで、各研究室でも運用できるようになることが望ましい。	【課題】 引き続き、研究成果の発表および外部資金の獲得を積極的に行なう。	【課題】 なし
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	新年度初めに新入生に対するアンケートを実施し、本学科受験生の傾向や動向についての把握に努める。	研究室間交流と研究成果の積極的配信	教務以外の場面においても、教員が積極的に学科学生との親睦に努める。
実行サイクル	____1____年サイクル（令和4年～令和5年）	____1____年サイクル（令和4年～5年）	____1____年サイクル（令和4年～令和5年）
実施 スケジュール	新年度の早い段階に、フレッシュマンセミナーにおいて新1年生全員を対象にアンケートを実施する。アンケート結果を集計し、本学科を受験する受験生の傾向や本学科を受験するに至った経緯、より発信が望ましい情報などについて学科として検討を行なう。	研究室間での研究交流を活発に行い、学科プレゼンスと研究力の向上を目指す。	・前期終了時に、本学科教員主催で新入生歓迎会を開催する。 ・8月末頃より、教員が手分けして醸造科学科統一本部の活動をサポートし、収穫祭の成功を支援する。
目標達成を測定する指標	アンケート結果を整理してデータ化し、学科教員全員で共有する。それを、オープンキャンパスや学科HP・大学案内等での情報発信を有効に行なう上での基礎情報として利用すること。	研究室間での協力回数や成果物等の数で評価する。	上記各種イベントの実施すること。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	コロナ禍でアンケートを実施できなかった。	研究室を整備は既に完了し、問題なく研究を遂行している。新規教員の採用数は1名であり目標を達成した。これにより2023年度より1研究室3教員 学科で計18人の体制で運用となる。研究室間交流については、前年度より活発になり、研究室間での共同研究も遂行している。	新入生歓迎会についてはコロナ禍により全体での実施は出来なかったが、本学科醸友会のイベントをオンラインで開催し、教員との親睦を深めた。また、統一本部学生のサポートも行い、収穫祭と体育祭に参加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
山本 祐司
栄養科学科

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	管理栄養士として必須の栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の取得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	1 年サイクル（令和4年～5年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会へ参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌へ投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測定する指標	達成度を判断するための指標としては、教員の学会発表演題数、掲載論文数、外部資金への申請数などを確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	(1) 多くの教員が栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会へ参加し、43 演題を発表した。 (2) 多くの教員が栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌へ投稿し、和文 9 報、英文 18 報、計 27 報発表した。 (3) 個人もしくはグループで外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに 20 件の申請を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・教員が卒業研究指導を通じて研究を行い、研究成果を公表していくことは、教員及び学生双方にとって意欲の向上につながる。
	【特色】 ・科学的根拠に基づいた栄養管理・栄養指導が行える管理栄養士の輩出に貢献することができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	令和4年度活動報告書

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	農学と医学の領域を融合させた高度な専門的知識および技術を有し、社会に貢献できる管理栄養士を育て、病院や介護施設、食品企業、行政機関などに輩出する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和4年～5年）
実施 スケジュール	(1) 学生への意識付けのために地域・産業界・官庁等で活躍している社会人による講演を1年次のフレッシュマンセミナー等にて実施する。 (2) 地域・産業界・官庁等との連携をとるために、たとえば地域での健康推進事業等を積極的に推進する。
目標達成を測 定する指標	(1) 社会人による講演のレポート課題を通して学生の認識を確認する。 (2) 地域・産業界・官庁等との連携状況を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	(1) 社会人による下記の講演を実施し、提出レポートにて管理栄養士の社会貢献への認識を確認した。 1年生：フレッシュマンセミナー 「公立学校で働く栄養士の仕事内容」（上祖師谷中学・星野美樹先生） 「病院で勤務する管理栄養士の仕事について～疑問は前進への第一歩～」（五反田リハビリテーション病院・西田明子先生） 「食品企業について」（山崎製パン株式会社・山内美波先生） 3年生：栄養科学特論 「国立病院機構及び中央省庁における管理栄養士業務について」（昭和女子大学・調所勝弘先生） 「食品会社における管理栄養士のはたらき方」（株式会社ヤヨイサンフーズ・廣瀬千明先生） 「大学院での学びと栄養疫学研究の実例」（国立研究開発法人 国立がん研究センター・金原里恵子先生） 「フードサービス分野の専門職としての働き方 スープストックトーキョーの事例」（株式会社スープストックトーキョー・山森純子先生） 「給食管理の現場で働く病院管理栄養士の話」（国家公務員共済組合連合会 虎の門病院・手呂内翠子先生） 「理研ビタミンの事業と食品改良剤のご紹介」（理研ビタミン株式会社・丸山慶輔先生） (2) 地域・産業界・官庁等との連携状況。 資料のとおり、20件の連携を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・管理栄養士の活躍状況を知ること、自らの卒業後をイメージしやすくなり、学習意欲の向上につながる。また、教員が産学連携や地域の健康推進事業などに関わることで、社会における管理栄養士の役割を確認し、学生教育に還元することができる。
	【特色】 ・管理栄養士は様々な分野で活躍しているが、入学までに具体的な情報を得ることは難しい。そのため、入学当初のフレッシュマンセミナーで様々な管理栄養士像を知ること、学ぶ意欲の向上につなげる。そして就職活動に先立って3年後期に具体的な活躍状況を知ること、将来の方向性を考える情報源となる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	令和4年度活動報告書

学部・研究科名 応用生物科学部
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 食品安全健康学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標			
実行サイクル	_____年サイクル（令和 _____年～ _____年）	_____年サイクル（令和 _____年～ _____年）	_____年サイクル（令和 _____年～ _____年）
実施 スケジュール			
目標達成を測 定する指標			
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	食の流通のグローバル化によって、市場には新たな食材や加工食品があふれ、人々は豊かな食文化を楽しむ一方で、在来・外来の食材が食の安全を脅かす危険から自分たちを守る必要が生じている。こうした「食の安全・安心」をはじめ「食の機能と健康」を科学的に解明する研究拠点である食品安全健康学科の教育・研究内容について、あらゆる機会を通じて広く社会に発信する。	食品安全科学分野および健康機能科学分野における研究発表、外部資金の申請を積極的に行う。
実行サイクル	____1____年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	____1____年サイクル（令和 4 年～ 5 年）
実施 スケジュール	1. キャンパスツアーや学部学科説明会で、本学科の教育・研究内容を紹介する。 2. 高校生を対象とした訪問授業を行い、本学科の教育・研究内容を紹介する。 3. オープンキャンパスにおいて、本学科の教育・研究内容を紹介する。 4. 広く雑誌媒体等により、本学科の教育・研究内容を紹介する。	1. 関連学会、関連学術雑誌における発表を積極的に行う。 2. 科研費、研究財団が行っている研究助成など外部資金に積極的に応募する。 3. 企業が関心をもつようなテーマを積極的に設定し、企業からの委託研究の機会を増やす。
目標達成を測定する指標	1. 3. に関しては、参加人数により確認する。 2. に関しては、派遣教員の人数、並びに模擬講義での聴講者の人数により確認する。 4. に関しては、掲載数、その媒体の販売部数により確認する。	1. 学会発表数、学術雑誌発表数を確認する。 2. 外部資金への応募数を確認する。 3. 委託研究（共同研究）数を確認する。
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名		

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本学科のディプロマポリシーにある「食品安全健康学科は、食の安全と健康機能の専門領域における確かな知識と技術、研究能力を修得し、食の安全と健康機能上の問題解決力を身に付けている人材」であることを広く食品企業等関連業界に周知させる。
実行サイクル	___1___年サイクル（令和 4 年～ 5 年）
実施 スケジュール	1. 本学主催の企業懇談会（ZOOM）に出席し、多くの企業に本学科の教育について説明する。 2. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科PRを行う。
目標達成を測定する指標	1. 企業懇談会で対応した企業数を確認する。 2. 参加学会を確認する。 3. 問い合わせを受けた企業数を確認する。
自己評価 （ ☒ を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	1. 本学主催のZOOMによる企業懇談会には、6名の教員が参加し、各が3社、合計18社の企業に対して当学科および当学科の学生について周知した。 2. 参加学会数は、全教員で77件であった。 3. 問い合わせを受けた企業は、全教員で52件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】
	【特色】 本学科で行っている研究を企業懇談会および学会の懇親会・交流会で、企業関係者にPRできた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】
	【課題】 引き続き、学会や懇談会において企業
根拠資料名	